

コナラ・サクラを用いたウスヒラタケ短木露地栽培及び普通原木露地栽培の検討

市村よし子¹・山口晶子²・金田一美有¹・小林久泰¹

1 茨城県林業技術センター

2 茨城県県央農林事務所

要旨：ウスヒラタケについて、ほだ木に使用する樹種の違い及び栽培形態の違いによる収量性と発生時期について比較試験を行った。栽培試験にはコナラとサクラを用い、普通原木栽培と短木断面栽培を試みた。その結果、樹種の違いについてはサクラを用いた場合の収量が有意に高かった。サクラの原木形状は普通原木、短木どちらも発生が良好で差は認められなかった。茨城県での発生最盛期は、伏込1年目は9～10月、2年目は5～6月と8～10月で、ほだ木の寿命は2年程度であった。

キーワード：ウスヒラタケ、原木栽培、樹種、発生時期

Examination of outdoor cultivation of *Pleurotus pulmonarius* using logs of *Quercus serrata* and *Cerasus jamasakura* with different lengths

Yoshiko ICHIMURA¹, Akiko YAMAGUCHI², Miyu KINDAICHI¹, Hisayasu KOBAYASHI¹

1 Ibaraki Prefectural Forestry Research Institute, Naka, Ibaraki 311-0122

2 Ibaraki Prefectural Central Region Agriculture and Forestry Management Office, Mito, Ibaraki 310-0802

I はじめに

原木露地栽培のきのこのは施設栽培に比べ、生産経費が掛からない等のメリットがある一方で、秋に発生するきのこの種類が多く、収穫時期が集中してしまうという問題がある。しかし、発生時期が異なる複数のきのこを栽培することで、収穫時期の分散が期待できる。

ウスヒラタケ(図-1)はヒラタケ科に属し、ヒラタケに似ているが、一般に小型で肉が薄く、春から秋に発生する(3)。そこで、我々は初夏に収穫が期待できるきのことしてウスヒラタケに着目した。

ウスヒラタケの原木栽培については過去に短木での栽培試験の取り組みがあるが普通原木栽培の取り組みは少ない(1, 2, 4)。また、関東近県での取組事例がほとんどなく、茨城県内で入手が難しい樹種を使用している事例



図-1. 短木断面栽培で発生したウスヒラタケ

があることや、栽培環境・気象条件等も異なることが考えられるため、本県に適用するのが困難であると考えられる。そこで、本県での原木露地栽培に適した栽培方法を検討するため、本県里山で入手可能なコナラとサクラを用いて普通原木栽培と短木断面栽培により栽培試験を行い、本県での気象条件によるきのこの発生時期や収量、収量が見込めるほだ木の形状について検討した。

II 材料と方法

1. 材料 ウスヒラタケ種菌は県内での普及を想定して、当センター保有の野生系統 Ya5 と Wa1 の2系統を使用した。原木は、2016年伏込用は2015年12月、2017年伏込用は2016年11月に茨城県林業技術センター構内(以下センター構内と記載)で伐採したコナラとサクラを用いた。

2. 栽培試験 ほだ木作製は伏込当年の3月に行った。普通原木栽培では、直径4～9cm、長さ90cmの原木に、直径の3倍の数、シイタケ植菌用のドリルで穴をあけ、種菌を接種し、発泡スチロール製のふたで封入した。

短木断面栽培では、直径10～26cmの原木を長さ15cmずつに切り分けて2本を1組とし、一方の木口面に種菌を塗り、その上にもう1本短木を重ね、2本の短木で種

菌を挟み込んだ。接合部は布テープ(以下テープと記載)または塩化ビニル製の梱包用ラップ(以下ラップと記載)を使用し密着させた。

植菌後のほだ木は、センター構内のスギ林に遮光ネットで覆って仮伏せした後、2016年は9月、2017年は7月にセンター構内のスギ林に系統別、樹種別、形状・資材別に区分して各区2~15本伏せし、きのこの発生時期に各区の収量を調査した。なお、収量については、区画ごとにほだ木単位の材積(植菌時に測定した直径と長さから算出)を求め、材積(m³)あたりに換算して比較した。

III 結果と考察

1. 樹種と接合資材別の収量 図-2に処理区別の収量を示す。樹種による収量を比較すると、系統や形状ともにサクラの方がコナラよりも有意に高かった(Kruskal-Wallis, p<0.01)。サクラでは形状や資材による収量の有意な差は認められず、普通原木栽培・短木断面栽培ともに栽培方法として適していると考えられた。3年目の収量は2016年伏込区のWa1系統でわずかにあった(コナラ短木・ラップ, 0.8kg/m³)が2017年伏込区では認められず、発生継続年数は2年程度と見込まれた。

コナラ短木で接合資材の種類で比較すると、系統を問わずテープよりラップの収量が多い傾向が認められたため、ほだ木にラップが密着することで菌の蔓延が促進された可能性が考えられたが、ばらつきが大きく、統計的に5%水準の有意差はなかった(Kruskal-Wallis, p=0.09)。

2. 発生時期 図-3, 4に2017年伏込で収量が多かったYa5の月別収量を示す。サクラ(図-3)の発生最盛期は、伏込1年目は9~10月、2年目は5~6月と8~9月だった。コナラ(図-4)の発生時期は、伏込1年目は収量が少ないが11月、2年目は6月と9~10月だった。

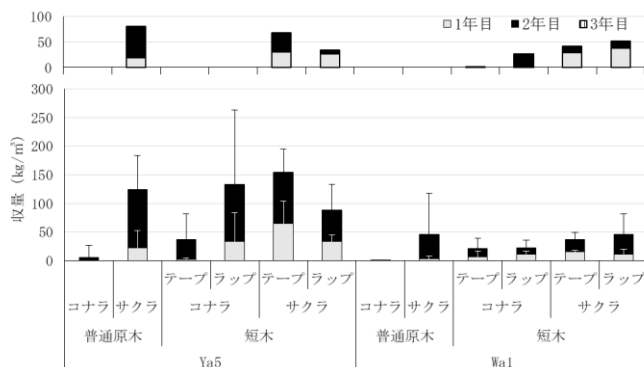


図-2. 原木形状・樹種・接合資材別収量
上は2016年伏込, 下は2017年伏込
2016年伏込は繰返未設定のため誤差未表示

IV おわりに

今回の結果から、樹種はサクラが適すること、サクラの原木形状は普通原木、短木どちらも発生が良好であることが明らかになった。また、発生最盛期は、5~6月と8~10月であり、本県でも初夏に収穫できるきのこであることが明らかになった。本報告ではスギ林での栽培試験結果を取りまとめたが、今後の普及のためには広葉樹林等異なる栽培環境での収量についても検討していく必要があると考える。

引用文献

- (1) 赤松やすみ・今井三千穂(2001)ニュータイプきのこの資源の利用と生産技術の開発(VI). 福井県総合グリーンセンター林業試験部業務報告 40: 21-22
- (2) 赤松やすみ・黒田真奈美(2002)ニュータイプきのこの資源の利用と生産技術の開発(VII). 福井県総合グリーンセンター林業試験部業務報告 41: 17-18
- (3) 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011)増補改訂新版山溪カラー名鑑日本のきのこ. 山と溪谷社, 東京: 23
- (4) 竹内隆人(1996)ウスヒラタケの栽培化試験-オガ栽培の可能性-. 岡山県林業試験場研究報告 13: 45-53

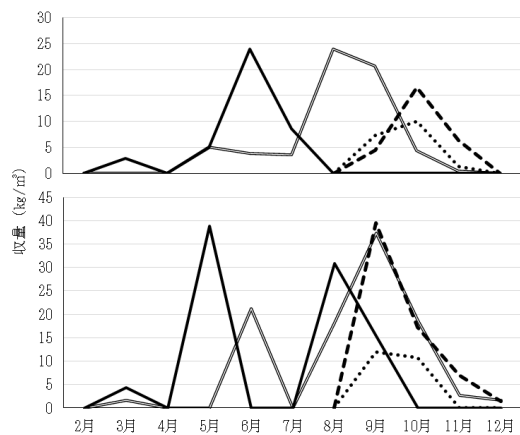


図-3. サクラを用いた場合の時期別収量(Ya5)
上は2016年伏込, 下は2017年伏込

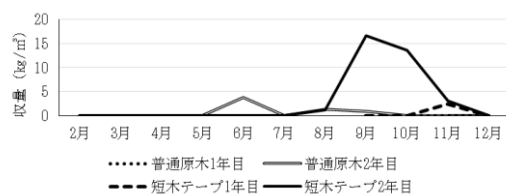


図-4. コナラを用いた場合の時期別収量(Ya5)
2017年伏込